

第22回 JC 総研欧州研修報告6：ドイツの農業協同組合

2011年のJC 総研欧州研修報告の最終回として、ドイツ中西部ヘッセン州のラインマイン果実・野菜協同組合を紹介したい。ラインマイン果実・野菜協同組合の所在地であるヘッセン州グリースハイムは、州都であるフランクフルト市から南に車で30分程度、ライン川の東岸の平野を利用した農業地帯にある。

ドイツの農業は、平坦地の広がる北部では穀物を主体とする大規模経営が多いのに対し、南部は山岳が多く、畜産の比率が高まり、経営規模も小さい。例えば、北部のニーダーザクセン州の農家当たりの農地面積は63haであるのに対し、南部のバイエルン州の農家当たりの農地面積は33haである。その中間にあるヘッセン州には、77万haの農地に1万8000戸の農家があり、農家当たりの農地面積は43haとなっている。ヘッセン州では、広い耕地を利用した穀物経営や酪農のほか、ワイン栽培も盛んである。また、ヘッセン州は地理的にヨーロッパの中心にあつて各種産業が発達し強い経済力を有しており、結果として他州に比べて兼業農家比率が高いという特徴を持つ。



写真：ラインマイン果実・野菜協同組合近くの野菜畑

1 ラインマイン果実・野菜協同組合の選別場にて

欧州の農業協同組合は、日本にある経済事業、金融事業、共済事業などを行う総合農協ではなく、特定の作物の販売や資材の供給を行う専門農協であり、ラインマイン果実・野菜協同組合もヘッセン州の南部で青果物や切り花の販売を行う農業協同組合である。1967年に、それまであった2つの農業協同組合が合併して設立された。ライン川、マイン川、オーデンの森で囲まれた一帯が活動対象となっており、対象となる農地は3万5000haである。組合員数は2011年時点で111名となっている。

組合の2010年の農産物販売額は655万ユーロ（約7億円、1ユーロ=107円で換算）で、取り扱い品目は、売上高に占める割合の多い順に、アスパラガス、タマネギ、インゲン、イチゴ。この他、ジャガイモ、ルバーブ、スイートコーン、ガーキン、プルーン、ベリー類、ハローウィン用のカボチャなどを、周辺のパルクフルト、ニュールンベルク、ハイデルベルグなどの都市に市場経由であるいはスーパーに直接販売している。



私たちが訪れた10月は、取り扱い品目の中心はタマネギであり、タマネギを満載した大きなトレーラーからタマネギがおろされ、分別機に乗せられているところであった。タマネギは紫、普通、白の3種であり、普通種はタキイの種を使っているようだ。分別機では、5つの規格に分類し、それを50gから25kgパックまで、多種の袋に詰める。5kg詰めが一番多い。出荷先には、イギリス、デンマーク、スペインなどもあるが、ほとんどはドイツ国内向けである。また、端境期の4～6月にはラインマイン果実・野菜協同組合がタマネギをニュージーランドから輸入し、出荷している。地元のタマネギの生産量は1万2000トンであるのに対し、輸入も含めた出荷量は2万トンとなっており、ドイツ全体の3%のシェアだという。

ラインマイン果実・野菜協同組合の地下には3000トン入るタマネギ倉庫があり、組合員農家に貸し出している。50トン単位で貸しているが、2000トン分は1軒の農家が使っているようだ。概ね1haの農地でタマネギを50トン収穫できるが、規模の大きな農家になると40haでタマネギを作っているという。

この数年タマネギは豊作が続き値段が安く、2011年はとくに豊作で平年の15%増となり、タマネギ収入だけではやっていけない、と担当者は浮かない顔だ。タマネギを倉庫に保管することで、輸入分を減らし、組合員の手取りを上げたいとのことだった。



下の写真の木の籠は、アスパラガスを出荷するためのもので、チェコで作られたものだ。アスパラガスは高級野菜で、このライン・マイン地域のアスパラガスは特に有名だそうだ。出荷時期は4～6月でほぼドイツ国内向けである。ほとんどが白アスパラガスで、グリーンアスパラは少ない。

ラインマイン果実・野菜協同組合でアスパラガスを出荷する農家は約 40 戸。規模は 2 ha から 200ha までとばらつきは大きい。アスパラガスの収穫作業は労働集約的であり、この時期には 100ha の経営だと 400 人程度の労働力が必要になる。ラインマイン果実・野菜協同組合には加湿装置がついたアスパラガス用の倉庫がある。アスパラガスは REWE、エディカなど大手スーパーへの直接販売の比率が高い。地元のアスパラガスの生産量は 1000 トンであるのに対し、組合の出荷量は 1400 トンであり、他の産地から買って出荷するものもある。スーパーによってパッケージが異なるので、組合でスーパーごとのパッケージを行い、出荷している。



2 ラインマイン果実・野菜協同組合の事業概要

この野菜の選別場や地下のタマネギ倉庫を視察した後、会議室にてタマネギケーキをいただきながら協同組合の取り組みについての話を聞いた。



ラインマイン果実・野菜協同組合は、アスパラガスやタマネギ、イチゴなどを組合員や足りなければ海外を含む他産地から集め、卸やスーパーに出荷する。2010年の売上げの内訳は、80万ユーロがスーパーへの直接販売、550万ユーロが卸向け、個別の店には1万ユーロ、その他の小さな出荷先向けが4万ユーロ、加工用に20万ユーロだった。卸の力が弱まりスーパーへの直接販売が増える傾向にあるようだ。

一方、組合員に対しては、種や資材の販売、組合が保有するタマネギの植え付け機械、収穫機械、アスパラの冷却機械などの農業機械の貸与、技術指導や営農指導などを行っている。組合員が払う販売手数料は10%である。組合の担当者からは、特に農業による環境負荷への対応について、土壌の窒素分の分析や、生産者の農薬使用量をチェックしているとの説明があった。また、エネルギーをどのように節約するかを指導もしている。HACCPの導入や、グローバルGAP取得の推進、ヘッセン州の食品衛生基準への対応のための指導など、環境や食品安全に熱心に取り組む様子が伺えた。

ラインマイン果実・野菜協同組合は、有給の組合長と、無給の副組合長及び5名の役員からなる。無給の6名のうち4名は現役の農業者、2名は退職した農業者であり、役員は3年毎に改選している。総会は年1回開催され、組合員は1人1票を持つ。組合員の出資額は、最低額が1300ユーロであり、売上高1万5000ユーロ以上で9100ユーロの出資額、売上高10万ユーロ以上で2万2100ユーロの出資額というように、売上高に応じて出資額が増える。職員数は、正職員が16人、パート職員が5人、他に研修生が2人となっている。

驚いたのは組合員数に見る農業構造変化のすさまじさであった。1967年の組合設立当初の組合員数は1万5500人であったが、2011年現在は111人。特に以前は取扱量の半分を占めていた果実の生産者が、産地のあるオーデンの森の一帯の宅地化によって減ったそう。しかし、その間総農地面積自体は大きく減っていないという。しかも、111人の現組合員のうち農業生産活動をしているのは68軒の農家であり、その中の29農家で組合の売り上げの94%を占めるといふ。ヨーロッパの中で比較的経営規模が小さいと言われるドイツの青果物部門でも、農業の構造変化、大規模化は急速に進んでいた。

3 ドイツの農業協同組合

2008年の統計によれば、ドイツには2994の農業協同組合がある。ドイツの農家戸数は37万戸、農業者数は78万人であるのに対し農業協同組合の組合員数は181万人となっており、これは多くの農業者が複数の組合に所属しているからである。2994の農業協同組合の内訳は下の表のようになっている。

ドイツの農業協同組合の主要指標（2008年）

協同組合の分野	組合数	市場占有率 (%)	農業者組合員の数 (千人)	売上高 (億ユーロ)	雇用者数 (千人)
多目的・資材供給など	541	54	1,232	22.9	47.0
牛乳・酪農品	290	70	108	10.8	10.4
牛肉・豚肉	116	28	215	4.8	3.0
ワイン	218	30	51	0.8	3.3
青果物	94	50	29	2.5	4.9
その他	863	-	131	0.7	10.6
旧東ドイツ	872	-	41	2.0	23.1
合計	2,994	-	1,807	44.5	101.5

資料：DEUTSCHER RAIFFEISENVERBAND

ドイツの農業協同組合数は、1998年には4221であったので、この10年間に約3割減少したことになる。同時期にドイツの農家数は53万戸から37万戸へと3割減少している。一方、この間に農業協同組合の総売上高は18%伸びており、また農業協同組合の市場占有率も横ばいから上昇しており、農業協同組合の統廃合と同時に競争力強化が図られていると言えよう。

2011年のJC総研欧州研修では、協同組合発祥の地である欧州を訪れ、厳しい経済情勢の中で様々な展開を図る協同組合や農業の現場を体感してきた。2012年は国際協同組合年。JC総研は今年も協同組合発祥の地を訪れる欧州研修を企画している。今回は、ヨーロッパ協同組合本部による英国マンチェスターでの各国の協同組合を集めた大イベントへの参加も予定されている。日本の農業協同組合の新たな可能性を感じる機会となることを期待している。

